

第九章  
地球の癌

「治験が進むワクチンに期待が集まっているけど、九五パーセント以上の効果が見込まれるって、どうなんだろう」

「一〇〇人にワクチンを接種したら九五人が新型コロナウイルスに感染せずに済むと言うことじゃ」

大家の発言に山本がテレビの中で微妙な反応をする。

「それより副反応が心配です。インフルエンザのワクチンの接種では一〇〇万人に数人しか副反応は出ません」

「前も尋ねたけれど『副反応』は『副作用』とどう違うの」

田中が山本を見つめる。

「そうだったわね。ごめんなさい。答えるの忘れてたわ。厳密に言うとは違うけれど通常の医薬品で言われている『副作用』と同じだと思っても間違いではないわ」

「ふーん」

詳しい説明があると思っていた田中が拍子抜けする

「いずれにしてもじゃ。ワクチン接種の効果と副作用というのか副反応は天秤の関係に似ておるのじゃ」

意外なことに大家が得意げに割り込んでくる。

「インフルエンザのワクチン接種効果はその年にもよるが七、八十パーセントぐらいじゃ。新

型コロナウイルスのワクチン接種効果が九五パーセント以上と言われているからかなり好成績じゃ」

「へー、大家さんがワクチンの研究者だとは知らなかった」

「茶化すな。しかしじゃ。有効期間がよって効果率も変わってくるのじゃ。例えばハシカ。一度ワクチンを接種するかハシカに感染すれば死ぬまでハシカにかからない。ほぼ一〇〇パーセントの効果があるのじゃ。毎年接種しなければならぬインフルエンザワクチンとはまったく違うのじゃ」

「そうか。簡単に効果がいくらなんて、その持続性も考慮しないと判断できないんだ」

「それより怖いのは副反応じゃ。一〇〇人に一人でも副反応が出ればワクチンとしては失格じゃ。インフルエンザワクチン摂取で副反応が現れるのは一〇〇万人に数人に過ぎん。そうじゃろ？ 山本さん」

「大家さんのおっしゃるとおりです。さて昨日現在で一人ほど摂取して副作用と思われる症例が数人確認なされているようです。でも効果があるのなら摂取する方がいいのかしら。思案のしどころね」

「危険な賭じゃが医療従事者は摂取すべきじゃろ」

田中には大家が医学博士に見えてくる。

「医師や看護師は新型コロナウイルスから人類を守る兵士のような存在。当然『矛』<sup>ほこ</sup>はもちろ

んのこと『盾』も持たさなければならんのじゃ」

「そのとおりだわ。それなのに医療従事者を中傷誹謗する人がいる。だから退職するのです。中傷誹謗はなかなか表面化しないから政府はそれこそ得意のスピード感を持って手を打つ必要があるわ。『矛』や『盾』は当然で手当も厚くして新型コロナウイルス感染の影響でほかの病気の患者が来なくなって経営が苦しくなった医療機関にも手を差し伸べるべきだわ」

「政府はゴーツー・トラベル・キャンペーンをするぐらいならゴーツー・ホスピタル・キャンペーンをすべきじゃ」

すかさず田中が叫ぶ。

「なるほど！」

「症状が悪化しないうちに治療しなければ助かる命も助からないわ」

「とにかく政府と知事の足の引っ張り合いはもちろんのこと、後手後手に回るのではなく早急に手を打つべきじゃ」

「首相がやっと『スピード感』という台詞を止めて『先手先手』と言いはじめました」

「それより『なるほど』と国民が納得できる手を具体的に打ってほしいものじゃ」

「なるほど」

弱々しく相づちを打つと山本が画面から消える。

\*\*\*

## 第九章 地球の癌

「しかし、不思議じゃ」

大家が盛んに首をかしげる。

「どうしたんですか」

田中が大家の顔をのぞき込む。

「どの国もお互い往来を禁じておるのに、第一波、第二波、第三波と同じように感染が収束しては拡散しておる」

「程度の差こそあれ、傾向としてはどの国もよく似てますね。こんな流行はマネしなくていいのに」

テレビに電源が入ると山本が現れる。

「便利なテレビだなあ。分からないことがあると勝手にスイッチが入る」

「私が食事をしているときやトイレにいるときは質問を遠慮してね」

「了解じゃ」

「でも大家さん、いいところ突いているわ」

「それほどでも」

大家が柄にもなくはにかむ。

「答えはずばりウイルスは変異するからです」

「変異？」

## 第九章 地球の癌

「ウイルスの遺伝子の一部が変化するのです」

「でも一波、二波、三波と寄せては引くというような感じになるのはなぜ？ 変異に時間がかかると言うこと？」

「そのとおりです。すべてのウイルスが次の朝、新型に変身することはありません」

「そうか。じゃが、感染が一時的にでも収まる……いや下火になるのはなぜじゃ？」

「抗体ができるというのが原因だと考えられます」

「抵抗力ができたからか」

「それもあると思いますが……」

珍しく山本は自信なさそうな表情をする。

「……感染した人をウイルスごと隔離してしまうので、ウイルスは次の宿主に移動できなくなります。感染を防ぐと言うことは人間を隔離すると言うよりはウイルスを隔離するのです」

「そうか。宿主ごと隔離するのか」

「乱暴なやり方、つまり宿主になる人間をひとりひとり隔離してしまえば、完璧に感染を封じ込めます」

「なあーんだ。全員絶食して二週間ほど超田舎のお寺に行って座禅を組めばいいんだ」

「ダイエツトにもなるわ」

「まあ、お寺に行かなくても日本全体をダイヤモンド・ウィークのような連休にして部屋に閉

## 第九章 地球の癌

じこもって心身ともにリフレッシュしてから働き出す。そうすれば経済に与える影響も超少なくなる」

「なんじゃ？ ダイヤモンド・ウィークというのは」

「ゴールドデン・ウィークは長くても十日程度。二週間の連休なら金のワンランク上の命名が必要かと思つて」

山本が「なるほど」と言いたくなるが、大家は「フン」と鼻で笑う。

「アホか。都会や国レベルの問題ではないのじゃ。地球全体でしなければ意味がないのじゃ。ウィルスは地球の生命体のご本尊様であることを忘れとる。しかも相手は余りにも小さすぎる。どんなやり方をしても必ず漏れるのじゃ」

田中がシユンとすると山本も仕方なく同意する。

「はて？」

大家の声が急に小さくなる。

「ひよつとして……」

「どうしたんですか」

田中が心配して大家に近づく。

「もし地球に意識があるのなら、つまり母なる地球としてはもうこれ以上人類を抱えきれないと悲鳴を上げているのかもしれない」

## 第九章 地球の癌

田中が急に震え出す。

「ひよっとして……」

今度は山本がテレビの中から田中と大家を心配そうに見つめる。

「二人ともどうしたの？」

「人類は……」

二人が合唱する。

「人類は地球の癌！」

山本が驚いて復唱する。

「ガン!?!」

「わしらがこのまま増殖すれば地球は死んでしまうのじゃ」

「えー!」

田中と大家は山本の反応を無視して一気統合する。

「人類以外の全生命体がウイルスに頼み込んで地球を不治の病から救おうとしているんだ」

「まったくそのとおりじゃ。『ウイルスとの戦い』と威勢のいいことを言っておるが、人類は地球の生命体としては新参者。この新米は地球を死滅させる恐ろしい癌じゃ」

「癌は人間を死に追いやれば一緒に火葬場へ行く。同じように人類は地球を死に追いやり自らも絶滅する」

「またもやそのとおりじゃ。人類の歴史を見ると癌と同じように母なる地球という身体の彼方此方に転移しておるのじゃ」

「核兵器のことですね」

「それだけじゃないぞ」

山本が暗い表情で大家と田中を見つめる。

「私、思いつきり気絶してもいいかしら」

画面の真下に山本が落ちる。

\*\*\*

例のテレビには誕生から現在に至る人類の歴史がCGを使って分かりやすく流れる。

人類誕生後の人口は少なかった。猛禽類や爬虫類などから身を隠しながらお互い助け合って狩猟で何とか食糧を確保して食いつないできた。そして夜はひっそりと洞窟の中で暮らしていた。

それがいつの間にか火を使い道具を作って徐々に勢力を広げていった。小動物を仕留める程度の威力しかなかった幼稚な道具はやがて人間同士が殺し合う武器へと変わった。やがて血縁関係を重視し部族を形成するとお互い戦うようになった。

一方で「殺されるかも」という死の恐怖から逃れるために呪術が生まれ宗教に昇華させた。宗教から科学が派生して様々な学問が生まれると技術が発達する。より便利な生活を求めると

## 第九章 地球の癌

同時に殺傷能力の高い武器も発達する。部族は統合され民族となつて、やがて他民族との領土争いに発展する。そして宗教の論理化に成功した民族が論理化に後れを取った他民族を一方的に支配下に置く。そして全滅させるか奴隷化してその国土を奪う。

勝手にその国土を『新世界』と命名して次々と植民地化する。同時に物言わぬ動植物を乱獲し、一部を家畜化し農業を広めた。もはややりたい放題に地球の隅々まで人類が闊歩する時代を作り上げた。

はじめは非常にスローペースだったが、最終的には全人類と言うより地球上の全生命体を抹殺できる強力な兵器まで開発した。完全に地球を破壊できる強力な兵器だ。敵国の兵士だけでなく無差別に市民を巻き込み地球をも破壊してしまうほどの……

そんな人類の暴走を止めるのは自らの英知しかないのだが、ナシヨナリズムの前では簡単に吹っ飛んでしまう。そう判断したのか、生命の起源ウイルスが微妙にコントロールされた感染力を持つことになる。しかも症状ができるだけ表面化しないように感染力拡大に乗り出した。そして脱皮するかのようにその威力が増す。いわゆる変異だ。

\*\*\*

生命倫理委員会では大空を悠々と飛ぶ鷹が会議をリードする。

「我が一族には重要な家訓がある」

「家訓とは？」

「能ある鷹は爪を隠す」

「おお！ 素晴らしい家訓だ」

ウイルスが大きく頷く。

「身体をだるくさせたり、味覚を衰えさせたり、発熱させたりせずに、要は人間に感づかれなように分裂増殖作戦を実行しろと言いたいのだな」

「特に若い人間は無知で、かつ動き回るのが好きです。しかも育ち盛りで……」

「我らもあの元気さには手を焼いておる」

「若い人間の細胞は元気で分裂速度が速い。それを利用するのです」

「よく分かった。それでは今回の作戦を説明する」

具体的な作戦が決まる。そしてウイルスが、いや生命体倫理委員会の会長が宣言する。

「それでは『能ある鷹作戦』を実行する。まず『脱皮作戦』続いて『認識遅延作戦』だ。突撃！」

\*\*\*

生命倫理委員会会議の模様を例のテレビで眺めていた大家の顔が真っ青になる。

「えらいことになったぞ」

もちろん田中も山本もただ事ではないと覚悟する。ウイルスの拡散が爆発的に増える。

「『脱皮作戦』というのは変異して感染力を強力にする戦略だってことは分かるけれど『認識遅延作戦』って、どんな攻撃をするんだ？」

「それは首相の記者会見を見れば分かるわ」

テレビにさえない表情をしたいつもの首相が現れる。

「感染拡大が収束に至っていないどころか感染者数が増加していることが明らかだという認識に至りました」

「そんなこと、とつくの昔から分かっている！」

大家と違って田中が冷静に口を開く。

「この人、官房長官のままだ」

「何を言っておる。今は首相じゃ」

「だって口調や説明の仕方は首相と言うより前任の官房長官そのものなんだもん」

「そう言われれば、確かにそうじゃなあ」

「長い間官房長官をしていたから癖が抜けないのかなあ」

「長年首相の見解を、少し時間をおいて差し支えないように説明する癖がついていたからか。」

田中さんの言うとおり確かに首相としての発言の感じが官房長官時代のそれとよく似ておるのう」

「認識不足と言っているくらい気付くのが遅すぎる。あつ、そうか！　これが認識遅延作戦なのか」

テレビの中で首相がさえない表情を変えることなく会見を続ける。

「都知事からの要請もあったので強い危機感を共有して、専門家の意見を求めるための会合を開いた結果を分析して検討した結果、先ほどの認識に至ったわけです。そこで関係各省庁の意見も踏まえて調整した結果、明日の午後に最終決定会議を開催することが決まりました。そして都知事も連携しながらしっかりと全力で取り組むことをその日のうちに発表する方針としました」

山本が天を仰ぐ。

「何を言いたいのかさっぱり分からないわ」

しかし、会見場にいる記者は突っ込むことなく黙って首相の言葉を聞いている。やがて質疑に入る。

「と言うことは緊急事態宣言を発出すると言うことですか？」

記者からの質問に首相がゆっくりと答える。

「仮定の話には答えることはできません。先ほども申し上げましたように明日中には今後の方針を検討した上で決定してから記者会見を開いて説明する予定です」

田中が怒り出す。

「それじゃ今会見する必要ないじゃないか！ しかも明日の夜？ これじゃ『緊急』ではなく

『ノロノロ』事態宣言じゃないか！」

しかし、会見場の記者たちは不思議なほど冷静だ。田中のように興奮する者は皆無だった。

山本が何かに気付く。

「これは……ウイルスが仕掛けた『認識遅延作戦』に違いないわ」  
大家が頷く。

「こんな対応では国民は首相の宣言を真に受けられないぞ」

「そうですね。長年いい加減な、しかもごまかしの口先答弁ばかりしてきたから、誰も『なるほど』と納得しません。こんなことを一国の首相たる者が気付かないと言うことは……ウイルスの作戦勝ち……と言うことになるわ！」

大家が山本の発言に残念そうに頷く。

「国民投票で首相を選ぶのなら落選確実じゃ！」

「なるほど。でも首相は選挙で選ばない方がいいと思います」

大家も山本も不思議そうに田中を見つめる。

「だって首相になって欲しい人なんかどこにもいないモン」

三人とも黙ってしまふ。これもウイルスが仕掛けた「認識遅延作戦」の成果なのかも知れない。